

脱”学校（2002年真宗大谷派月刊誌「同朋」より）

最近、モデルの持つ力の大きさを痛感する。「いい子」というモデルは誰にも押し付けられ、後々まで大きなダメージを人に与える。自分が分からない、現実感がない。その苦しさはさまざまな形で表現される。自他への暴力、反社会的行動、中毒、病気、・・・私たちはどこかで自分とはぐれてしまったらしい。一体どこで？

「学校は砂漠」「人生がない」と嘆く八歳の息子と”脱”学校をして五年。おかげで学校にまつわる、こじれた問題に悩まされることはない。それでこどもが育つのかという人が多いが、逆に考えてみたいのは、学校でこどもがどう育つのかということだ。

そこではまず、自分を脇に置いておくことを学ぶ。自分の主体性に関係なく、与えられたものを受け取る。命令に従う。競争する。モデルをめざす・・・といった要求、方向付けが繰り返され、家庭はそれをどこまでも支援する。

「こどもは学校へ行かなければならない」というのはあやまった認識だ。五十年以上前から義務教育の義務は、こどもにあった教育を保障すべき大人の側の義務なのだ。こどもに学校へ行く義務はない。あやまっ

た認識が生む悲惨な事件に限らず、世の中に蔓延する、とらえどころのないけだるさは、生きる主体としての自分を感じることをできない、「傍生」としてのそれに近い。自分と再会したい。今からでも遅くない。

”脱”学校とは学校へ行かないという形に限らず、学校的価値観や「いい子というモデル」に左右されるのを止めることだ。自分をズタズタにしてまで敷かれたレールの上を走ることはない。レールをおりてみれば、そこには思いもよらない美しい野原が広がっていたりするのだから。

* * * * *

以上は10年前に書いた文章だ。既存の学校から離れ、息子2人はホームスクーリングをベースに、デモクラティックスクールで学んだ。そのスクールも15年(デモクラティックスクール10年)の歩みを重ねた。息子たちもOBとなり、兄は大学生、弟は音楽活動に励んでいる。自由とはなかなか厳しいものだ。レールの上に乗っていた方が楽な事がたくさんある。しかし残念ながらレールは途中で終わる。特に今の社会、安全なレールなどあるのだろうか。そこを走る電車には目に見えない問題が降りかかる。競争、いじめに加えて放射性物質の心配までしなければならない時代となった。因果関係を証明できないリスクがレール上に待ち構えて、どこへ連れて行かれ

るか分からない。もちろんそこをたくましく通り抜けて行くこどももいるだろう。でもそうでないこどももいるだろう。こどもは自分に合った学びを与えられるべきなのだ。教育に選択肢がないことは大きな問題だと思う。

この15年既存の学校を選ばなかった多くのこどもが自分なりの成長をして行く姿を見てきた。それが良かったのか悪かったのかは分からないが、少なくともどの子も自分の時間を生きてきたように思う。それが保障されたことはありがたいことだったと思う。小さくてもデモクラシーの実現する人間関係の中で育ったということは、自分の生きる社会に向けて一つのまなざしをもったということだろう。これからの人生の基盤となるはずだ。浄土を持つことと似ていると感じている。しかしだからこそ、悩みも大きいだろう。試行錯誤の青春にエールを送りたい。(惟)

祝デモクラティックスクールまっくろくろすけ10周年記念出版 せせらぎ出版1800円



昨日、原発事故由来の放射能の被曝を避けるために関東から縁あって、避難してきたお母さんお話を聞く機会がありました。とにかく事故以降、「公」に流される情報は、彼女たちを安心させるには程遠く偏ったものでしかなく、情報を集めるためにパソコンの前に座る時間が多くなり、自分で学んで行くしかなく、知っていけば行くほど、関心のない人とのギャップが深まっていて、辛かったと言われていました。例えば、給食に出る食材はどこで採れたものなのか、又、きのこ類のように食材によっては放射性物質を取り込みやすい物があり、そののところをはっきり聞いたり、使用しないで欲しいと言いが難しく、問題があっても放射能に対する認知度の温度差があって中々、共有できないのが現実で、弁当を持たせているお母さんもおられました。そんな中、子どもは給食の時間には給食当番をし、その日のメニューを皆で昭和和する。そして学校は給食を残さず食べましよう競わす。気になる食材が入っていても…又、こちらに避難するにあたって、元、住んでいた所から大事なアルバムだけは持ってきたが、生活用品や衣類等は持ち込まないようにした。と。子どもたちをヒバクを避けるために避難してきたというのに、完全に避けることができない、「個」の限界を話して下さいました。そして、同時に瓦礫処理の受け入れや被曝食材・被曝資材・被曝肥料…等の流通も私たちの身に迫った問題としてあります。本当に関

西に住んでいる私と命がけで避難してきている彼女たちと共に生き合おうとした時、共有する問題は「ヒバク」です。放射能にさらされる全てのいのちは影響を受ける。その影響を受け易い小さいいのちを守るということは、全てのいのちを守っていくという広がりを持っているということになるのでしょうか。